九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

征服とシヴィリティ : ルネサンス期のアイルランド統治論

木村, 俊道
九州大学大学院法学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1560259

出版情報：法政研究. 82 (2/3), pp.77-105, 2015-12-25. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

征服とシヴィリティ

――ルネサンス期のアイルランド統治論――

木村俊道

はじめに
一　人文主義と帝国
（一）帝国のルネサンス
（二）マキァヴェッリにおける帝国と征服
二　アイルランドの征服と野蛮
三　帝国とシヴィリティ
四　ルネサンス期のアイルランド統治論
（一）トマス・スミスの植民論
（二）ビーコンとハーバート
（三）エドマンド・スペンサーにおける征服とシヴィリティ
おわりに

はじめに

グローバル化やヨーロッパ統合の進展、あるいは、最近ではスコットランド独立をめぐる住民投票に見られるように、これまでの主権国家や国民国家の枠組みは大きく揺らぎ続けている。しかし、ルネサンス期を含め、おおよそ一六世紀から一八世紀までの初期近代（近世）early modern と呼ばれる時代まで歴史を振り返れば、「デモクラシー」の理念と同様に、これらの近代的な「国家」State の概念もまた、あくまでも、ウェストファリア条約やフランス革命などを転換点とする時代の産物にすぎないことが分かる。本稿では、このような問題関心を一つの出発点として、政治思想史の観点から、一元的な権力や均質的な国民から成り立つ「国家」が自明でなかった時代の、ルネサンス期におけるアイルランド統治論を取り上げてみたい。

よく知られているように、かつては近代国家の一つの模範とされた「イギリス」は、現在でもなお、イングランドとウェールズ、スコットランド、北アイルランドから構成される「連合王国」United Kingdom である。しかも、それはかつて、全世界に版図を広げた帝国でもあった。そして、このような「ブリテン帝国」British Empire が形成される過程の一つの重要な起点となったのが、一二世紀以降に繰り返された、イングランドによるアイルランドの征服であった。それゆえ、アイルランドの統治をめぐっては、「帝国」や「征服」、あるいは「植民」や「改革」などをめぐる、近代的な「国家」の視点からは充分に見えてこない言説が展開されるようになったのである。

他方でまた、このような近代的な「国家」の概念に加え、「文明」civilization という言葉が登場したのも一八世紀後半以降のことであった。サミュエル・ジョンソンによる『英語辞典』(1755)[1] の記述にも見られるように、それ以前は、文明を意味する言葉として「シヴィリティ」civility が用いられていた。この「シヴィリティ」は、野蛮や未開と対置される一方で、動的な進歩の過程や産業技術の発達を含意する近代の civilization とは異なり、秩序や礼儀、丁寧さ、

そして市民性などを広く意味した。[2] ブラディックによれば、このような多義的なシヴィリティの概念は、ブリテン帝国のもとに諸地域を統合し、秩序を形成するうえで大きな役割を果たした。[3] そして、ルネサンス期におけるアイルランド統治を正当化する大きな理由の一つは、実際に、征服や植民、改革などを通じて「シヴィリティ」を導入し、野蛮や未開の状態を改善することに求められたのである。

このように、ルネサンス期のアイルランドに着目することは、北西ヨーロッパの端に位置し、ブリテン島の西にあって大西洋に浮かぶ一つの島の記憶や経験を明らかにするだけでなく、近代的な「国家」と「文明」の見方を歴史的な観点から問い直すための、一つの重要な出発点となるであろう。

ところが、この時代のアイルランドへの関心は、少なくとも国内の政治思想史研究においては、わずかに佐々木武氏の論稿などを除き、ほとんど見られなかった。[4] それゆえ、「イギリス」政治思想史においても、たとえば「市民革命」や「立憲主義」などに比べ、「ブリテン帝国」の形成やアイルランドの「征服」、ウェールズの「併合」、スコットランドとの「合同」、北アメリカ等への「植民」、さらには「同盟」「連邦」「属領」といった国家の単位を超える対外的な主題については関心が薄かったように思われる。

とはいえ、近年ではその一方で、主権国家や国民国家の揺らぎを反映して、たとえば英国学派に見られるように、「国際」的な政治思想の展開にも関心が集まるようになってきた。近年ではまた、マキァヴェッリやグロティウスなどに加え、ホッブズやロック、モンテスキュー、ヒューム、バークなどの国際政治思想に関する研究や、連邦主義やコスモポリタニズム、国家主権、戦争と平和、帝国や外交などの思想史や概念史の研究も着手されている。[5]

他方でまた、とくにブリテンとアイルランドに関して見逃せないのが、これまでのイングランド中心の一国史観や、アイルランドの愛国主義的な歴史観を覆すに至った、近年における歴史研究の目覚ましい進展である。とりわけ、ポーコックによる「ブリテン史」の提唱は一九八〇年代末以降に広く受け入れられるようになった。[6] これに加えて、初期近

代のヨーロッパの諸国家が、一元的で均質な国家ではなく、その領域内に複数の共同体や民族、制度や文化などを抱える「複合的」composite もしくは「多元的」multiple な国家であることも併せて認識されるようになった。[7] その結果、「ブリテン」もまた、イングランドのみならず、ウェールズやスコットランドやアイルランドなどから構成される複合的もしくは多元的な国家であるという観点から、「ブリテン島」や「大西洋群島」を舞台とした相互作用の歴史を描き直す試みが盛んに行なわれるようになったのである。[8]

また、クインやキャニーらによって先導されてきたアイルランド史研究[9]や、アメリカの側からベイリンらによって提唱された「大西洋史」研究によって、アイルランドの植民地の経験が、ブリテン島のみならず、大西洋を越えて新大陸と結びつけられるようになった。[10] さらに、従来の帝国史研究[11]の進展に加え、以上のような「ブリテン史」や「大西洋史」研究などの架橋を試みる研究[12]として、たとえばアーミティジは「ブリテン帝国」のイデオロギー的起源や「独立宣言」の世界史、「近代国際思想」の基礎といった新たな主題を開拓している。[13] そして、以上の諸研究は、歴史学の分野に狭く留まることなく、文学研究などの他分野の研究を巻き込みながら、これまでの「イギリス」（＝イングランド）の枠を超えた一連の「ブリテン」政治思想史研究を生み出したのである。[14]

本稿では、これらの研究成果を踏まえながら、近代的な「国家」や「文明」の観点からは充分に見えてこない、複合的・多元的なブリテン帝国の形成をめぐる言説の一端を明らかにすることを試みる。そのうえで、今回は、一七世紀以降に本格化するスコットランドとの統合問題やアメリカへの植民計画の先例となる、ルネサンス期のアイルランドをめぐる人文主義的な統治論を考察したい。以下で明らかになるように、同時代のアイルランドはまさに、イングランドによる征服や植民や改革を通じて、レトリックや思慮などに具現される人文主義的な教養やシヴィリティの実践が集合的に試みられた一つの「実験場」[15]であったのである。

一　人文主義と帝国

（一）帝国のルネサンス

デイヴィッド・ヒュームの『イングランド史』によれば、一四八五年におけるヘンリ七世の即位は同時にまた、「シヴィリティと学問」civility and sciencesの「夜明け」をもたらした。[16] 実際に、このウェールズ出身のヘンリから一六〇三年に崩御するエリザベス一世に至るテューダー朝の時代は、人文主義の浸透が広く見られた、イングランドにおけるルネサンスの時代とされる。スキナーが『近代政治思想の基礎』（1978）で描いたように、古代ギリシアやローマをモデルとし、文法・修辞・詩・歴史・道徳哲学を基礎とする人文主義は、その発信源であるイタリアからアルプスを越え、イングランドを含む北方ヨーロッパへと伝播した。[17] この人文主義についてはまた、ハンス・バロンやポーコックによって、一四〇〇年代のフィレンツェ共和国において花開いた市民的人文主義civic humanismの重要性が強調されるようになった。とりわけ、ポーコックの『マキャヴェリアン・モーメント』（1975）のなかで、この市民的人文主義がマキァヴェッリを経て、一七世紀中葉のイングランドや一八世紀のアメリカの共和主義に受け継がれた過程が描かれたことはよく知られている。[18]

ところが、これらの研究において、先に述べたような帝国や、あるいは複合的・多元的国家と人文主義との関連は必ずしも充分に明らかにされてこなかった。たとえば、『近代政治思想の基礎』におけるスキナーの関心は逆に、あくまでも「近代の国家概念」が形成される「経緯」や「前提条件」を明らかにすることにあった。[19] また、ポーコックの影響を受けたコリンソンやペルトネンたちは、『マキャヴェリアン・モーメント』の議論を拡張し、一七世紀の内乱期以前からすでに、イングランドとアイルランドにおいて共和主義の萌芽が見られたことを強調する。そして、ここで彼らが

言う「君主政的共和国」monarchical republicあるいは「擬似共和主義」quasi-republicanismの例として着目されたのが、以下でも言及するトマス・スミスなどの顧問官たちであり、あるいはリチャード・ビーコンやエドマンド・スペンサーらを含むアイルランドの行政官たちであった。[20]

しかし、以下で議論するように、人文主義的な教養を有する彼らが実際に直面していたのは、近代国家の建設や共和主義の受容よりはむしろ、あくまでも君主政国家のもとで複合的あるいは多元的な帝国の拡大もしくは維持を目指し、複数のリヴァイアサンやビヒモスをいかに統治するかという、きわめて同時代的な難題であったように思われる。[21]そして、このような関心から、改めて同時代における人文主義の議論を眺め直すと、そこにはまた、ポリスやレス・プブリカなどに由来する伝統的な共同体の概念とともに、征服や植民、シヴィリティなどの帝国の統治と密接に関連する語彙もまた広く流通していたことに気づく。[22]そして、なかでも、これらの言説の歴史的な模範となったのが、帝国・支配権＝インペリウムimperiumの拡大に成功した古代ローマであった。それゆえ、レトリックや道徳哲学において人文主義的教養の基礎となるキケロもまた、たとえば『国家について』のなかで、「わが国民は同盟国を守ることにより、いま全世界の支配を獲得した」（3：35）と述べていたのである。[23]

（二）マキアヴェッリにおける帝国と征服

このような古代ローマをモデルとしたルネサンス期の帝国論において、その再生に大きな役割を果たしたのがマキアヴェッリである。ポーコックやスキナーをはじめとして、彼の共和主義に関する研究は盛んに行なわれてきたが、最近になって、彼の帝国論や拡大国家論にも関心が向けられるようになった。[24]なかでも、このような観点から新たに注目されるのが『君主論』の第三章と『ディスコルシ』第二巻であろう。

マキァヴェッリは、リウィウスの『ローマ建国史』に依拠して書かれた『ディスコルシ』の第一巻において、ローマ型の拡大国家とスパルタ・ヴェネツィア型の現状維持国家とを比較する。マキァヴェッリによれば、ローマは平民に武力を与え、外国人の移住を認めたが、後者は逆に平民を戦争に用いず、外国人に対して門戸を閉ざすことによって現状維持を目指した。この両者のどちらが望ましいかについて、彼は、征服の危険が常態化している現状を考慮し、「必要」necessità や「偉大さ」grandezza の観点から、内紛や対立を活力に変えて大帝国へと発展したローマ型の拡大国家を模範とした（1：6）。そのうえで彼は、自由を原理としたローマの内政を扱った第一巻に続いて、第二巻では外政に目を向け、ローマがいかにインペリウムを拡大したかについて考察を進めたのである。

それゆえ、『ディスコルシ』の第二巻は、帝国と征服の手引きとして読むことができる。マキァヴェッリによれば、「戦争の目的は征服すること」にあり、さらには征服地と本国をともに繁栄させることにある（2：6）[25]。そのために彼は、ローマの並外れた「力量と思慮」virtù e prudenza[26]に注目し（2：1）、帝国を築く方法について次のように述べた。

「このようにして為政者は、どうしたら市民の人口を殖やすか、従属国よりはむしろ同盟国を作るにはどうすればよいか、に心を配るようになる。さらには、征服した地方を防衛するために屯田兵を定住させたり、敵から分捕ったものは国庫に繰り入れる、敵を従えるには包囲戦を避けて、急襲とか会戦を行なう、また国庫は富ませて個人は質素にするように指導したり、さらに軍事教練を最も重視する、など一連の政策をとるようになるだろう」（2：19）[27]。

マキァヴェッリはまた、『君主論』の第三章から第五章においても、新旧の領土を併せた「混成型」の君主国を取り上げ、とくに征服の方法について細かく論じている。ところが、この第三章から第五章はこれまで、新君主国を主題と

する『君主論』のなかでは、力量ある新君主や市民型の新君主を扱った他章と比べ、充分に注目されてこなかった。しかし、なかでも第三章は、ローマの歴代皇帝の気質を考察した第一九章に次いで長い章であるだけでなく、「領土欲というのは、きわめて自然な、あたりまえの欲望である」といった、彼のリアリスティックな世界観や人間観が最初に示される章でもある。[28] そして、本稿の関心からとくに見逃せないのは、たとえばフランスにおけるブルゴーニュやブルターニュ、ガスコーニュ、ノルマンディーの併合の事例が挙げられているように、この章のなかで、同時代のヨーロッパにおける「混成型」、すなわち複合的・多元的国家と征服の問題が論じられていることであろう。[29]

マキァヴェッリは、ここでも「力量と思慮」[30]を有したローマを模範としながら、征服地における統治の技術について以下のように述べる。すなわち、占領した国を維持するためには民衆の支持が必要であるが、言語や風習が共通であり、かつ自由の伝統に欠ける場合は、領主の血統を根絶やしにし、他方で従来の法や制度を維持すれば充分である。ところが、言語や風習や制度が異なる場合には困難が大きいため、君主が自ら移住するか、あるいは経費のかからない移民兵を派遣することが必要となる、というのが彼の判断であった。

それでは、マキァヴェッリと同時代のアイルランドの場合はどうであろうか。

二　アイルランドの征服と野蛮

イングランドによるアイルランドの征服は、一二世紀のヘンリ二世の時代にまで遡る。しかし、アイルランドの場合は、ケルト系ゲール人の族長の勢力が残存するとともに、現地に定着したアングロ・ノルマン系貴族もまた独自に勢力を強めていき、アイルランド総督によるイングランドの統治が機能するのは、もっぱら「ペイル」（柵）と呼ばれるダブリン周辺地域だけに限定されるようになった。[31] それゆえ、アイルランドは、言語や風習や制度が異なる地域を抱える

とともに、現地の族長や領主が割拠する複雑な情況を呈するようになった。これに対して、ヘンリ八世と総督のセントリジャーは、一五四一年にアイルランドを「王国」に昇格させ、のちに「譲渡と再授封」surrender and regrant と呼ばれる政策を通じてゲール人の族長を「臣下」として取り込もうと試みる。また、エリザベス期には、アルスターやマンスターなどの植民に加え、総督のヘンリ・シドニーによって地方長官・評議会が設置された。しかしながら、中世以来の入植者である「オールド・イングリッシュ」に代わり、新たな支配者としてアイルランドに渡ってきたプロテスタントの「ニュー・イングリッシュ」による以降の一連の「改革」は失敗に終わり、テューダー朝末期の九年戦争における軍事的な「再征服」に帰結することになった。[32]

このように、テューダー期のアイルランドは、中世以来の歴史を有する「古き新世界」（山本正）であるとともに、「植民地」と「王国」という両義的な性格を有していた。それゆえ、アイルランドの統治には「征服」と「改革」、あるいは弾圧と融和をめぐる緊張が孕まれることになる。しかも、このような錯雑したアイルランドの統治論においてはさらに、宗教問題に加え、イングランドの「シヴィリティ」とアイルランドの「野蛮」を対比させる言説が加わることとなった。[33]

イングランドにおける、このような言説の起源となった作品として、ギラルドゥス・カンブレンシス（Giraldus Cambrensis; Gerald of Wales, c. 1147-1223）の『アイルランド地誌』*Topographia Hibernica* を挙げることができる。[34] ウェールズ出身のギラルドゥスは、パリで長く学んだ人文主義者であるとともに、ヘンリ二世の宮廷付聖職者としても活躍した人物である。そして、彼は『アイルランド地誌』なかで、「自然が隠しておいた大洋の秘所」に侵攻した「われらが西方のアレクサンドロス」であるヘンリを称賛する。ギラルドゥスによれば、ヘンリは、征服や統治に関するキケロやセネカの教えをまさに実践した人物であった。[35] しかし、これに対して、「別世界のような遠く隔たったところ」にいるアイルランドの人々については、怠惰な牧畜生活を送って農耕に従事せず、果樹や鉱物の恵みも得ようとしてい

ないことから、楽器の演奏技術に優れていることを除けば、「まさに野蛮である」として以下のような評価が下されたのである。[36]

「この民は未開人で、無愛想である。獣のみを食べて、獣のように生きている。原始的な牧畜をして暮らす生活からはなれていない。森から平地へ、平地から村、そして市民が集住する状態へと人間は進んでいくものだが、この民は農業労働を拒み、都市の富にもほとんど無関心で、市民の権利をそうかえりみもせず、森や草地でこれまで親しんできた生活を忘れ去ることができない」。[37]

また、ルネサンス期において、このようなアイルランド認識は、たとえば一五七七年に出版されたホリンシェッドの『年代記』*Chronicles* を通じて再生産されることになる。[38] ホリンシェッドによれば、この『年代記』には統治に必要な「政治的思慮」politike prudence が含まれているが、[39] このような人文主義的な観点から彼は、イングランドとスコットランドに加え、アイルランドの征服の歴史を『年代記』に加えたのである。

もっとも、ホリンシェッドによってアイルランド篇の初版の編集と執筆を実際に委ねられたのは、「ペイル」出身の人文主義者であるリチャード・スタニハースト（Richard Stanihurst, 1547–1618）であった。[40] そして、彼もまた、ホリンシェッドと同様の歴史観を繰り返したうえで、アイルランドの「野蛮」に加え、その「堕落」をともに「改革」する必要を訴えた。すなわち、征服後の植民によって、アイルランドにはかつて「シヴィリティが植え付けられ、良き法が定められ、忠誠が守られ、反乱が抑圧された」。[41] しかし、その後は逆に、アイルランド語の浸透や教育の欠如などを通じて「腐敗」が進み、[42]「生粋のイングランド人」も「未開の種類の人々と交際することによって堕落し、キルケーの毒杯を仰いだかのように様変わりしている」。それゆえ、「統治を委ねられた者」は、「誠意をもって政治 pollicye に励み、

彼らを粗野から知識、反乱から服従、裏切りから誠実、未開からシヴィリティ、怠惰から労働、邪悪から敬神へと導かれる」ようにしなければならない。彼によれば、それによって人々が「自分が盲目であることに気づき、だらしなさを認識し、生活を改善する」とともに、「女王陛下の法や布告」や「イングランドの栄えある統治」、そして「アイルランドの幸いなる改革」に従順となるのである。[43]

三　帝国とシヴィリティ

さて、このようなアイルランド認識を踏まえたうえで、以下では改めて、キケロやリウィウス、マキァヴェッリなどを媒介とした人文主義の帝国論やシヴィリティ論の受容の過程を簡単に点描する。[44] そのうえで次章では、トマス・スミスやエドマンド・スペンサー、あるいはリチャード・ビーコンやウィリアム・ハーバートといった「ニュー・イングリッシュ」の立場から展開されたアイルランド統治論の特徴を理解してみたい。

イングランドにおいて「帝国」の概念が公的に用いられた最初の例として挙げられるのが、一五三三年の上告禁止法における「このイングランド王国は帝国である」（this realm of England is an empire）の文言である。[45] もっとも、ここでの「帝国」は、領域的なものではなく、あくまでも教皇の権力から独立した至高の権力を意味していた。しかしながら、三六年のウェールズ併合や四一年のアイルランドの王国化を経て、イングランドは複合的で多元的な君主国となる。これに加えて、四〇年代にはスコットランドに対する領有権が主張され、「グレイト・ブリテン帝国」の主張が初めてなされることになった。[46] そして、ローマ的な拡大を志向する帝国や征服、植民、そしてシヴィリティの概念もまた、同時代の人文主義者たちに浸透していたと考えられる。

このことを示す例として見逃せないのが、同時代における人文主義的な政治エリート教育の手引きとなった、トマ

ス・エリオット（Thomas Elyot, c. 1495–1546）の『統治者論』*The Book Named the Governor*, 1531である。一六世紀の間に八版を重ねたこの作品のなかで、彼はジェントルマンの子弟の教育について、ギリシア語とラテン語の文法や叙事詩に続けて、レトリックと歴史を学ぶことを勧める。このレトリックは、説得や審議、あるいは助言や演説などにおいて「言葉を適切に、然るべき場所に収める」ものであるが、イソクラテスやデモステネス、クインティリアヌスらとともに、その模範として挙げられたのが、「全世界の帝国と支配権を有したローマ」において「素晴らしき雄弁で君臨した」キケロであった。(47)

また、古典古代の歴史家のなかで最初に言及されるのがリウィウスであるが、マキァヴェッリの『ディスコルシ』の冒頭部分と同様に、エリオットは、その叙述から「もっとも高貴な都市ローマが、貧しい小国から始まり、いかにして武勇と力量によって徐々に全世界の帝国と支配権を得るに至ったか」を学ぶことができると述べた。さらに、エリオットはまた、リウィウスにおけるポエニ戦争の記述とともに、カエサルを読むことを君主や顧問官に薦める。なぜなら、『ガリア戦記』の内容は、「カエサルの時代のスイス人やブリトン人と同程度の粗野で野卑な性質を有している」アイルランド人やスコットランド人との戦いに必要となるからであった。(48)

このような、古代ローマ帝国を模範とする人文主義のなかにはまた、レトリックや歴史のみならず、ホリンシェッドの『年代記』にも見られたような、シヴィリティの言説も展開されていた。たとえば、スターキ（Thomas Starkey, c. 1499–1538）によって一五三〇年前後に書かれた『プールとラプセットの対話』*A Dialogue between Pole and Lupset* のなかで、シヴィリティは文明や秩序の意味で用いられる。彼によれば、「すべての思慮や政治prudence and pollycy」は「静穏とシヴィリティをもたらす」ことに向けられるのであり、「人は、賢者の説得によってはじめて、粗野で獣のような生活から、人として自然なシヴィリティに入って行った」のである。(49)

このように、人文主義的な教養は、レトリックや歴史に育まれるのみならず、同時にまた、帝国の拡大とシヴィリ

ティへの移行を可能にするための思慮としても受容されていた。[50] 以下では、その具体的な展開を、とくにエリザベス期の「ニュー・イングリッシュ」によるアイルランド統治論を例に明らかにしてみたい。

四　ルネサンス期のアイルランド統治論

（一）トマス・スミスの植民論

最初に取り上げるのは、ケンブリッジ大学のローマ法欽定講座教授でもあったトマス・スミス（Thomas Smith, 1513–77）である。しかも彼は、その人文主義的な教養に加え、フランス駐在大使や秘書長官を務めるなど、アリストテレスやキケロに由来する活動的生活の理念を実践した人物であった。彼はまた、『イングランドのコモンウェルス』*De Republica Anglorum*, 1583 を執筆し、イングランドの国制の標準的な見取り図を提示したことでも知られている。[51] そのうえで、とくに帝国とシヴィリティの観点からはまず、このスミスが『コモンウィール論』*A Discourse of the Commonweal*, 1581 のなかで、エリオットと同様に、コモンウェルスを支える統治者や顧問官に論理学やレトリック、道徳哲学といった人文主義的な教養が不可欠であることを強調したことが注目される。なぜなら、学問は「人間のあいだにシヴィリティと知恵 wisdom と政治 policy をおしひろめるためになくてはならない」[52] からである。

しかも、スミスによれば、このような学問に優れたコモンウェルス、言い換えれば「政治的 politic で文明的 civil な国」こそが他国を支配することができる。その歴史的な事例となるのが、古代のギリシアやローマの帝国であり、そしてまた、ローマやサクソンやノルマンによるイングランドの征服という過去であった。彼によればまた、「帝国や王国を手に入れたり、それを維持したりするのは、人間の勇気や力によるというよりも、むしろ、知恵や政治によることの

方が多い」のであり、そうした「知恵や政治というものは、おもに学問によって得られる」のである。これとは逆に、学問や大学が疎かにされると「政治的な教養のある人」wise and politic men がいなくなり、「野蛮」へと退行するだけでなく、「以前わたしたちが支配していた他の国の意のままとなり、その国の奴隷となってしまう」というのが彼の判断であった。[53]

以上のような人文主義的な立場から、スミスは『コモンウィール論』や『イングランドのコモンウェルス』のなかで、トマス・モアによる空想上のユートピアとは異なり、イングランドの現状に即した改革案を提示したことを自負していた。[54] そのうえでスミスは実際に、一五七〇年代にアイルランドのアード半島への植民を計画することになる。[55] 彼と息子のトマスが女王エリザベスとの間に交わした七一年一〇月五日付の証書 indenture によれば、その目的は、「粗野なアイルランドの未開で野蛮な民に、より洗練された習俗とシヴィリティ more civility of manner をもたらすこと」にあるとされた。[56] 彼はまた、「イングランドによる植民計画のために印刷された最初の宣伝物」[57] とされる『I. B. からの手紙』*A Letter sent by I. B.*, 1571 を匿名で出版する。そのなかで彼は、「もう一つのユートピア」であるアイルランドへの植民を「最も名誉で利益のある航海」であるとして、とくにジェントルマンの子弟の参加を説いたのである。[58]

スミスはまた、同様の「説得」を同僚の顧問官（ウィリアム・セシル）や有力貴族（エセックス伯）らに対して行った。これらのうち、人文主義の影響をさらに示すものとして見逃せないのが、説得というレトリックの実践やシヴィリティの議論に加え、彼の植民計画のモデルとして古代ローマが挙げられていたことであろう。そして、スミスは実際に、計画の実施を委ねた息子のトマスに対して、カルタゴやヴェネツィアとともに、ローマが植民都市を建設した事例を参照しながら、「共に住むこと」が「シヴィリティの洗練」more civility をもたらすとして以下のように述べた。

「人間の習俗 manner は、共に助け合い、共通の利益や危険を有すればするほど、より洗練 civil され従順になる。

そうでなければ、彼らは獣の如く野蛮になるだろう。それが、これまでアイルランドを頽廃させてきた一因であった[59]」。

（二）ビーコンとハーバート

スミスと同様に、古典古代の世界をアイルランドの統治論に応用した人文主義者として、さらにリチャード・ビーコン（Richard Beacon, ?-2）とウィリアム・ハーバート（William Herbert, 1553?-1593）を挙げることができる。しかも、両者はともに、マンスターの植民に深く関与した行政官でもあった。以下で述べるように、彼らの議論は、とくにスペンサーと比較した場合に、アイルランド統治における説得や教育の役割を強調した点で注目される。

ビーコンが一五九四年に出版した『ソロンの狂言』*Solon His Folly*は[60]、そのタイトルに示されているように、古典古代の教養に立脚し、レトリックが駆使された対話作品であった。古代アテナイの立法者として知られるソロンは、ある時、狂気を装いながら詩を歌い始め、戦争を再開してサラミス島を領有するように民衆の心を動かした[61]。ビーコンは、この「最も賢明で熟練した統治者」であるソロンの故事に倣って、「征服され、衰退し、腐敗したコモンウィールの改革」を「説得」しようと試みたのである[62]。

ビーコンによれば、「衰退したコモンウィールの改革」は、「その原初の完全な状態の幸いなる回復に他ならない」が、とくにアイルランドの場合は全体が腐敗しているために、古来の法や慣習、生活様式、統治や制度といったコモンウィール全体に及ぶ「絶対的で徹底的」な改革が必要とされる[63]。もっとも、その一方で彼は、古来の法や慣習を改革するための手段として、権威や同意、強制力や徳とともに「説得の技術」の必要を強調した。それゆえ、第二巻では七章に亘って、たとえば「民衆の感情を動かし、勝ち取り、その気にさせ」、あるいは「嫌な事でさえも、人びとに喜ばれ、

受け容れられるようにする」ために、相手の感情を観察し、疑念を取り払い、説得したい事柄に議論を限定するなどの、「すべての公的な為政者」に必要な技術や方法が提示されたのである。[64]

ビーコンの議論で見逃せない点はまた、マキァヴェッリの影響が随所に見られることである。[65] たとえば、ビーコンは、党派対立を避けるために「もっともらしい約束と甘い言葉」を用いたソロンの「狡猾さ」について、マキァヴェッリと同様に、それを「正当にも政治 policie と呼ばれる」ものと評価した。[66] そのうえで、ビーコンはさらに、『君主論』と『ディスコルシ』の議論をアイルランドの統治の分析に応用する。たとえば、マキァヴェッリが『ディスコルシ』第二巻第二三章で述べるように、古代ローマと異なり、フィレンツェは征服に際して中途半端な方法を取ったために「帝国や統治を確実なものとし、コモンウィールを増大させる機会を失った」。それと同様に、アイルランドの征服も中途半端であったがために、「その統治が幸福で繁栄しているとは決して見られない」のである。[67]

このように、ビーコンは「権力」の必要を指摘する一方で、「説得」や「政治」、あるいは「秘密の思慮」や「良き法」や「厳格な為政者」などを通じて「改革」を進めようと試みた。[68] 彼はまた、「あらゆる王国の強さや力は群衆や民衆に存する」との立場から、アイルランドの衰退の大きな原因として、族長と領主の増長と圧政に注意を向ける。彼によれば、「征服によって獲得されたコモンウェルス」においては、「貴族の力よりも民衆の好意によって統治はより確かなものへと前進する」のであり、「学識ある著者」であるマキァヴェッリに従って、「民衆を抑圧の状態から解放する」ことが必要とされるのである。[69] ただし、その一方でビーコンは、法や宗教、慣習、言語を「統一」することに加え、「征服された国民を義務と服従に留め置く」必要も認識していた。そして、『君主論』第三章の議論と同様に、「永続的な不平不満」と「無限に続く出費」を招く駐屯軍と対比して、そのための「最も有益」な方法として挙げられたのが「植民」であった。[70]

他方でまた、ハーバートは『アイルランド論』*Croftus sive de Hibernia Liber* において、キケロの『ウェッレス弾

効』を用いながら、アイルランドを古代ローマの属州シチリアになぞらえた。[71] ハーバートはまた、アリストテレスやリウィウスなどに加え、とりわけ同時代の代表的な人文主義者であるリプシウスの『政治学六巻』に大きく依拠しながら、党派や反乱、暴政、非難や中傷、法や行政などに関する悪弊と対策を考察する。[72] そして、ハーバートは、ビーコンと同様に、「著名なイタリア人」であるマキァヴェッリの『君主論』の第三章から植民論を長く引用し、移民兵と駐屯兵の比較を行ったのである。『君主論』からは他にも、病弊を早期に発見して治療を施す必要や（第三章）、他力本願でなく自力で物事を行うこと（第六章）、民衆の憎しみを買わないことが最上の防衛策であること（第二〇章）、旧来の法や慣習を残したままにすると反乱が起き、破滅を招くこと（第五章）などが参照された。[73]

ハーバートの議論の特徴はまた、これらの悪弊を予防するための方策として教育の重要性が強調されていることに求められる。彼はここで、アイルランド語訳の聖書の必要やプラトンの教え、あるいは「学識が残虐さを抑制する」[74]ことなどを説くとともに、具体的な大学設置のプランを提示する。すなわち、ハーバートは、「徳と学問と人間的教養 humanitatis の最も悦ばしく純粋な源」である大学をダブリンとリメリックに設立し、神学・法学・医学のカレッジを置くだけでなく、その財源や給与や教師の配置についても細かく言及したのである。[75] このような教育的な観点から彼は、他にも、「思慮ある統治者」に対して「暴政的で危険な」手段を取るのでなく、公正な裁判や、法や衣服や習慣の統一、さらには為政者が「侮辱や嘲笑、敵対心や軽蔑」ではなく「優しさや親しみ」をもって接することなどを助言した。[76]

（三）エドマンド・スペンサーにおける征服とシヴィリティ

このように、ルネサンス期のアイルランド統治論は、古典古代の歴史やレトリック、あるいはマキァヴェッリやリプシウスの受容を通じて展開されていた。そのうえで、とくに征服とシヴィリティとの緊張を示す例として最後に取り上

げるのがエドマンド・スペンサー（Edmund Spenser, c. 1522-99）である。彼は同時代の英文学史を代表する詩人として一般に知られているが、同時にまた、アイルランド総督グレイの私設秘書や、大法官府裁判所やマンスター評議会の書記官などを務めた人物でもあった。そして、アイルランドで執筆された彼の『妖精の女王』*The Faerie Queen*, 1590, 96は、[77]騎士道の物語が描かれた文学作品であるだけでなく、以上のような帝国やシヴィリティをめぐる人文主義の言説が駆使されたテクストでもあった。[78]

この『妖精の女王』に収録されたウォルター・ローリー宛の手紙によれば、この作品の目的は寓意を通じてジェントルマン教育を行うこと（「紳士、即ち身分ある人に立派な道徳的訓育を施すこと」）にあった。[79]それゆえ、スペンサーは、ブリテンの王子アーサーの物語を軸に、アリストテレスが挙げた諸徳を具現する騎士を各巻に登場させる。なかでも注目されるのは、「正義」の騎士アーティガルがアイリーナ（アイルランド）救出に向かう物語が述べられた『妖精の女王』第五巻である。しかも、その冒頭では、バッカスによる「東洋全土」の征服、ヘラクレスによる「西洋全土」の征服への言及がなされるが、[80]このことは、第五巻の主題が正義による征服であることを示唆している。そして、スペンサーは以下の一文によって、「妖精の女王」（＝エリザベス）によるアイルランドの支配を正当化したのである。

> 「アイリーナと呼ばれるその婦人は、妖精の女王のもとに赴いて、女王に自分の窮状を訴え、慈悲深い援助を請い求めた。あの至高の女王、あの強大な女帝は、あらゆる哀れな嘆願者たちを助け、弱い王侯の保護者となるのを名誉とし、アイリーナ救出のためアーティガルを選ばれた」（5：1：4）。[81]

さらに、実際に植民地統治に携わっていたスペンサーはまた、この『妖精の女王』だけでなく、『アイルランドの現状についての見解』*A View of the Present State of Ireland*（書籍出版業組合登録1598）を執筆し、アイルランドの

現状分析と具体的な改革案を提示した。[82] そして、これらの改革の目的は、スミスやビーコン、ハーバートらと同様に、「野蛮」なアイルランドに「より善き統治とシヴィリティ」を導入し、「習俗 manners の統合」や「心の一致」、そして「一つの国民」を創出することにあった。[83]

もっとも、スペンサーによれば、イングランドもかつては野蛮であり、幾度も征服されてきたが、現在は「シヴィリティへと至り」、「善き交際 conversation」や「学識と人文学 humanitie」のあらゆる面で優れるようになった。[84] それゆえ彼は、この学問を一つの手段としてアイルランドに「洗練された交際」を行き渡らせようとしたのである。

> 「こうして子供たちは、洗練された交際 civil conversation へと短い間で成長し、かつての粗野な育ちを嫌うようになる。そして、両親もまた、まさしく若い子供たちの例と比べてみることで、自らの立居振舞いの見苦しさに気づくようになるだろう。学問はそれ自体で素晴らしい力を有しており、ひどく頑固で粗暴な性格を和らげ穏やかにすることができる」。[85]

ところが、これらのシヴィリティのヴィジョンに対し、アルスターの反乱が全島に波及し始めた頃に記されたスペンサーの見解には一方で、悲観的な色彩が強く見られるようになる。[86] 彼によれば、スキタイ人を先祖とする（とされる）アイルランド人の「野蛮」や、「オールド・イングリッシュ」の「堕落」は根深く、いまや「一斉に蜂起してイングランドへの従属を脱ぎ捨てようと合図を待っている」。それゆえに彼は、シヴィリティを導入する前にまず、「全てを白紙にもどして、統治の形態をすっかりかえてしまう」ことを求め、「より強権的な力」の必要を繰り返し主張することになる。[87] とはいえ、ここで見逃せないのは、このような緊張を有する作品の最後で彼が参照したのもまた、マキアヴェッリの『ディスコルシ』であったことであろう。しかも、スペンサーはそこから、ローマの自由や徳といった共和主義的

な議論を展開するのではなく、むしろ逆に、ヴェネツィアやフィレンツェなどの共和国とは異なり、「絶対的な権力」を統治者に与えた「古代ローマの統治の方法」を学んだのである。[88]

おわりに

以上のように、ルネサンス期のアイルランド統治論においては、古典古代の歴史やレトリック、あるいは寓意や寓話などが駆使された人文主義の言説が展開されていた。また、そこには、キケロやリウィウスに加え、とくにマキァヴェッリの影響が色濃く見られたが、それはむしろ、自由や徳などをめぐる共和主義的な議論よりも、複合的・多元的な君主政国家を前提にした帝国や征服、あるいは野蛮や堕落を克服するための思慮やシヴィリティの議論を促すものであった。もっとも、そこにはまた、ギラルドゥスやホリンシェッドにはじまり、スタニハーストのような「オールド・イングリッシュ」による改革論から、スミスの植民論、そしてスペンサーのような軍事的な制圧論に至るヴァリエーションが見られた。しかし、それらは一方で、エリオットなどによって育まれた、同時代のイングランドとアイルランドにおける人文主義的な教養の広がりとともに、その実践的な性格を物語っていよう。実際に、顧問官であったスミスをはじめ、ビーコン、ハーバート、スペンサーらはアイルランドの統治に深く関与していたのである。

もっとも、アイルランドについては他にも、ヨーロッパ規模で広がるカトリックや亡命者による議論や、[89] イングランドとアイルランドの両国にまたがる貴族の名誉をめぐる言説、[90] あるいは吟遊詩人（バード）によって詠われたアイルランド語の詩など、多様な議論が展開されていた。しかし、「ニュー・イングリッシュ」による人文主義的な統治論だけを取り上げても、そこには、近代的な「国家」や「文明」とは異なる、複合的・多元的な帝国における思想的な諸問題が孕まれていたのである。このようなアイルランド視点からは、おそらく、ホッブズやロック、あるいは「市民革命」

などを中心としてきた従来の「イギリス」思想史とは異なる風景が見えてくるであろう。

（1） Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (London, 1755).

（2） 木村俊道『文明の作法―初期近代イングランドにおける政治と社交』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。

（3） M. J. Braddick, *State Formation in Early Modern England, c. 1550–1700* (Cambridge University Press, 2000), pp. 337–341; 'Civility and Authority', in David Armitage and M. J. Braddick (eds.), *The British Atlantic World, 1500–1800* (Palgrave Macmillan, 2nd ed., 2009), pp. 113–132.

（4） 佐々木武「「問題」としてのアイルランド―その'nature and origins'を求めて」佐々木武・田中秀夫編『啓蒙と社会―文明観の変容』京都大学学術出版会、二〇一一年、三―二八頁。

（5） 最近の例を一つだけ挙げれば、押村高編『政治概念の歴史的展開』第七巻、晃洋書房、二〇一五年。

（6） J. G. A. Pocock, *Discovery of Islands: Essays in British History* (Cambridge University Press, 2005)（ポーコック『島々の発見―「新しいブリテン史」と政治思想』犬塚元監訳、名古屋大学出版会、二〇一三年）. Glenn Burgess (ed.), *The New British History: Founding a Modern State 1603–1715* (I. B. Tauris, 1999).

（7） H. G. Koenigsberger, '*Dominium Regale* or *Dominium Politicum et Regale*: Monarchies and Parliaments in Early Modern Europe', in his *Politicians and Virtuosi: Essays in Early Modern History* (The Hambledon Press, 1986), pp. 1–25. J. H. Elliott, 'A Europe of Composite Monarchies', *Past and Present*, no. 137 (1992), pp. 48–71.

（8） その一例として、Paul Langford (general ed.), *The Short Oxford History of the British Isles*, 11 vols. (Oxford University Press, 2000–2008)（鶴島博和監修『オックスフォード ブリテン諸島の歴史』全一一巻、慶應義塾大学出版会、二〇〇九年―）. もっとも、ポーコックは、「大西洋群島」に加え、北アメリカ植民地や、オーストラリアやニュージーランドなどの白人入植地も広く視野に収めている。国内における共同研究の例として、岩井淳編『複合国家イギリスの宗教と社会―ブリテン国家の創出』ミネルヴァ書房、二〇一二年。

（9） 代表的な研究例として、D. B. Quinn, 'Ireland and Sixteenth Century European Expansion', in T. D. Williams (ed.), *Historical Studies I: Papers read before the Second Irish Conference of Historians* (Bowes & Bowes, 1958), pp. 20–32; 'Renaissance Influences in English Colonization', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th series, vol. 26 (1976), pp. 73–93. Nicholas Canny, 'The Ideology of English Colonization: From Ireland to America', *The William and Mary Quarterly*, 3rd

series, vol. 30, no. 4 (1973), pp. 575–598; *Kingdom and Colony: Ireland in the Atlantic World, 1560–1800* (The John Hopkins University Press, 1988); *Making Ireland British 1580–1650* (Oxford University Press, 2001). ただし、キャニーはブリテン史とは距離を置く。Canny, 'Writing Early Modern History: Ireland, Britain, and the Wider World', *The Historical Journal*, vol. 46, no. 3 (2003), pp. 723–747. 逆に、クインやキャニーを批判し、アイルランドをヨーロッパの西端にある多元的王国として理解する議論として、Hiram Morgan, 'Mid-Atlantic Blues', *The Irish Review*, vol. 11 (1991), pp. 50–55. Andrew Hadfield, 'Rocking the Boat: A Response to Hiram Morgan', *The Irish Review*, vol. 14 (1993), pp. 15–19.

(10) バーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』和田光弘・森丈夫訳、名古屋大学出版会、二〇〇七年。Armitage and Braddick (eds.), *The British Atlantic World, 1500–1800*. 法政大学比較経済研究所・後藤浩子編『アイルランドの経験—植民・ナショナリズム・国際統合』法政大学出版局、二〇〇九年。

(11) Wm. R. Louis (chief ed.), *The Oxford History of the British Empire*, 5 vols. (Oxford University Press, 1998–1999). Luois (chief ed.), *The Oxford History of the British Empire, Companion Series* (Oxford University Press, 2004–).

(12) Armitage, *Greater Britain, 1516–1776: Essays in Atlantic History* (Ashgate, 2004). Jane Ohlmeyer, 'Seventeenth-Century Ireland and the New British and Atlantic Histories', *The American Historical Review*, vol. 104, no. 2 (1999), pp. 446–462.

(13) Armitage, *The Ideological Origins of the British Empire* (Cambridge University Press, 2000) (アーミテイジ『帝国の誕生—ブリテン帝国のイデオロギー的起源』平田雅博他訳、日本経済評論社、二〇〇五年)；*The Declaration of Independence: A Global History* (Harvard University Press, 2007) (『独立宣言の世界史』平田雅博他訳、ミネルヴァ書房、二〇一二年)；*Foundations of Modern International Thought* (Cambridge University Press, 2013) (『思想のグローバル・ヒストリー—ホッブズから独立宣言まで』平田雅博他訳、法政大学出版局、二〇一五年).

(14) その一例として、Armitage (ed.), *British Political Thought in History, Literature and Theory, 1500–1800* (Cambridge University Press, 2006).

(15) 「初期近代のアイルランドはルネサンス政治思想の実験場であった」。Morgan, 'Beyond Spenser?: A Historiographical Introduction to the Study of Political Ideas in Early Modern Ireland', in Morgan (ed.), *Political Ideology in Ireland, 1541–1641* (Four Courts Press, 1999), p. 9.

(16) David Hume, *The History of England: From the Invasion of Julius Caesar to the Revolution in 1688*, vol. 2 (Liberty Fund, 1983), p. 518 (池田和央・犬塚元・壽里竜訳「ヒューム『イングランド史』抄訳（一）第二三章末尾小括」『経済論集』(関西大学) 第五四巻第二号（二〇〇四年）、一五〇—一五一頁).

(17) Quentin Skinner, *The Foundations of Modern Political Thought*, 2 vols. (Cambridge University Press, 1978)（スキナー『近代政治思想の基礎―ルネッサンス、宗教改革の時代』門間都喜郎訳、春風社、二〇〇九年）.

(18) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition: With a New Afterward by the Author* (Princeton University Press, 2003)（ポーコック『マキャヴェリアン・モーメント―フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統』田中秀夫他訳、名古屋大学出版会、二〇〇八年）.

(19) Skinner, *The Foundations of Modern Political Thought*, vol. 1, p. ix, vol. 2, p. 349（『近代政治思想の基礎』七、六二九頁）.

(20) Patrick Collinson, *Elizabethan Essays* (The Hambledon Press, 1994). Markku Peltonen, *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought* 1570–1640 (Cambridge University Press, 1995). J. F. McDiarmid (ed.), *The Monarchical Republic of Early Modern England: Essays in Response to Patrick Collinson* (Ashgate, 2007).

(21) とくに、ウィリアム・セシルについては、Christopher Maginn, *William Cecil, Ireland, and the Tudor State* (Oxford University Press, 2012).

なお、同時代のアイルランドをめぐる政治思想を人文主義の観点から理解する研究としては、他にも、植民論における古代ローマの影響（クイン、キャニー）や、キリスト人文主義からプロテスタンティズムへの移行（ブラッドショー）を強調する議論などが見られた（註9、50、86参照）。これらの研究に対して、本稿では、人文主義をイデオロギーとして捉えるのではなく、古典や歴史に育まれた教養、あるいは実践知の政治学として理解し、状況の変化に対応するレトリックや思慮、シヴィリティ、あるいは「政治」policy などをめぐる言説の展開に注目する。したがって、本稿の関心は、ルネサンス期のイングランドおよびアイルランドの人文主義が、帝国や君主政、複合的・多元的国家などの文脈において、ときには暴力や武力を許容しながらも、いかに統治を成立させようとしたのかという点にある。実践知としての人文主義については、木村『文明と教養の〈政治〉―近代デモクラシー以前の政治思想』講談社選書メチエ、二〇一三年。

(22) 初期近代における「帝国のルネサンス」や「帝国的人文主義」imperial humanism の影響に着目した最近の研究として、T. J. Dandelet, *The Renaissance of Empire in Early Modern Europe* (Cambridge University Press, 2014).

(23) キケロー『国家について』岡道男訳（『キケロー選集』第八巻）岩波書店、一九九九年、一二五頁。

(24) Mikael Hörnqvist, *Machiavelli and Empire* (Cambridge University Press, 2004); 'Machiavelli's Three Desires: Florentine Republicans on Liberty, Empire, and Justice', in Sankar Muthu (ed.), *Empire and Modern Political Thought* (Cambridge University Press, 2012), pp. 7–29. 厚見恵一郎『マキァヴェッリの拡大的共和国―近代の必然性と「歴史解釈の政治学」』木鐸社、二〇〇七年。鹿子生浩輝『征服と自由―マキァヴェッリの政治思想とルネサンス・フィレンツェ』風行社、二〇一三年。Marco

Cesa (ed.), *Machiavelli on International Relations* (Oxford University Press, 2014). A. M. Ardito, *Machiavelli and the Modern State*: The Prince, *the* Discourses on Livy, *and the Extended Territorial Republic* (Cambridge University Press, 2015).

(25) マキァヴェッリ『ディスコルシ―「ローマ史」論』永井三明訳、ちくま学芸文庫、二〇一一年、三〇八頁。なお、原語の確認とは、Niccolò Machiavelli, *Discorsi sopra la Prima Deca di Tito Livio*, introduzione di Gennaro Sasso, note di Giorgio Inglese (Biblioteca Universale Rizzoli, seconda edizione, 1996) を用いた。

(26) マキァヴェッリ『ディスコルシ』二七七頁。

(27) 同、三七六頁。

(28) マキアヴェリ『君主論』池田廉訳、中公クラシックス、二〇〇一年、二二頁。

(29) マキァヴェッリがここで、ロマーニャやロンバルディアの諸都市を念頭に置いていたことを明らかにした議論として、鹿子生『征服と自由』一八三―一九五頁。

(30) マキアヴェリ『君主論』一九頁。

(31) 山本正『「王国」と「植民地」―近世イギリス帝国のなかのアイルランド』思文閣出版、二〇〇二年。以下におけるアイルランド史の理解は、この書に多くを負っている。

(32) これらの「改革」の経過や実態をめぐる、キャニー、ブラッドショー、ブレイディらの論争については、山本『「王国」と「植民地」』第二章。

(33) Clare Carroll, 'Barbarous Slaves and Civil Cannibals: Translating Civility in Early Modern Ireland', in Carroll, *Circe's Cup: Cultural Transformations in Early Modern Ireland* (University of Notre Dame Press, 2001), pp. 11–27.

(34) Morgan, 'Giraldus Cambrensis and the Tudor Conqust of Ireland', in Morgan (ed.), *Political Ideology in Ireland, 1541–1641*, pp. 22–44.

(35) Giraldus Cambrensis, *Topographia Hibernica*, in his *Opera*, vol. 5 (ed.), J. F. Dimock (London, 1867: Cambridge University Press, 2012), pp. 189–191（ギラルドゥス・カンブレンシス『アイルランド地誌』有光秀行訳、青土社、一九九六年、二五七―二五九頁）. Gerald of Wales, *The History and Topography of Ireland*, (tr.), J. J. O'Meara (Penguin Books, 1982), pp. 124–125.

(36) Cambrensis, *Topographia Hibernica*, pp. 152–153（『アイルランド地誌』二〇五頁）. Gerald of Wales, *The History and Topography of Ireland*, pp. 102–103.

(37) Cambrensis, *Topographia Hibernica*, p. 151（『アイルランド地誌』二〇四頁）. Gerald of Wales, *The History and*

Topography of Ireland, pp. 101–102.

(38) 一五七七年版のアイルランド篇は、Holinshed, *Holinshed's Irish Chronicle*, (eds.), Liam Miller and Eileen Power (The Doleman Press/ Humanities Press, 1979). なお、本稿では一五八七年版についての考察は省略した。

(39) Holinshed, *Holinshed's Irish Chronicle*, p. 5.

(40) Colm Lennon, *Richard Stanihurst: The Dublner 1547–1618* (Irish Academic Press, 1981); 'Richard Stanihurst (1547–1618) and Old English Identity', *Irish Historical Studies*, vol. 21, no. 82 (1978), pp. 121–143.

(41) Holinshed, *Holinshed's Irish Chronicle*, pp. 9, 13–14.

(42) Holinshed, *Holinshed's Irish Chronicle*, pp. 14, 29.

(43) Holinshed, *Holinshed's Irish Chronicle*, pp. 115–116.

(44) マキァヴェッリのイングランドでの受容については、Felix Raab, *The English Face of Machiavelli: A Changing Interpretation 1500–1700* (Routledge & Kegan Paul, 1965). Alessandro Arienzo and Alessandra Petrina (eds.), *Machiavellian Encounters in Tudor and Stuart England: Literary and Political Influences from the Reformation to the Restoration* (Ashgate, 2013). アイルランドでの受容については、Carroll, 'The Janus Face of Machiavelli: Adapting *The Prince* and the *Discourses* in Early Modern Ireland', in Carroll, *Circe's Cup*, pp. 91–103.

(45) G. R. Elton (ed.), *Tudor Constitution: Documents and Commentary* (Cambridge University Press, 2nd ed., 1982), p. 353.

(46) この時代の「帝国」概念については、Armitage, *The Ideological Origins of the British Empire*, ch. 2（『帝国の誕生』第二章）. ただし、同様の主張は、スコットランドではすでに、一四六九年になされていた。*Ibid*., pp. 35–36（『帝国の誕生』四八頁）。

(47) Sir Thomas Elyot, *The Book named the Governor*, (ed.), S. E. Lehmberg (Everyman's Library, 1962), pp. 34–35.

(48) Elyot, *The Book named the Governor*, pp. 37–38.

(49) Thomas Starkey, *A Dialogue between Pole and Lutpset*, (ed.), T. F. Mayer (Royal Historical Society, 1989), pp. 5, 7. Starkey, *A Dialogue between Reginald Pole & Thomas Lutpset*, (ed.), K. M. Burton (Chatto & Windus, 1948), pp. 26, 28. 塚田富治『カメレオン精神の誕生―徳の政治からマキアヴェリズムへ』平凡社、一九九一年、三五―四〇頁。なお、礼儀や作法としてのシヴィリティに関する議論については、紙幅の関係で本稿では省略した。

(50) アイルランドと人文主義について、ブラッドショーは、とくにプロテスタンティズムと対比させながら、「コモンウェルス」論やキリスト教人文主義の影響を強調する。Brendan Bradshaw, *The Irish Constitutional Revolution of the Sixteenth Century* (Cambridge University Press, 1979); 'Sword, Word and Strategy in the Reformation in Ireland', *The Historical Journal*, vol.

21, no. 3 (1978), pp. 475-502; 'Robe and Sword in the Conquest of Ireland', in Claire Cross, David Loades, and J. J. Scarisbrick (eds.), *Law and Government under the Tudors: Essays presented to Sir Geoffrey Elton* (Cambridge University Press, 1988), pp. 139-162; 'The Elizabethans and the Irish', in *Studies: An Irish Quarterly Review of Letters, Philosophy and Science*, vol. 65 (1977), pp. 38-50; 'The Elizabethans and the Irish: A Muddled Model', *Studies: An Irish Quarterly Review of Letters, Philosophy and Science*, vol. 70 (1981), pp. 233-244. 「農耕」や「エスニシティ」に焦点を合わせた近年の研究として' J. P. Montaño, *The Roots of English Colonialism in Ireland* (Cambridge University Press, 2011). Ian Campbell, *Renaissance Humanism and Ethnicity before Race: The Irish and the English in the Seventeenth Century* (Manchester University Press, 2013).

(51) Sir Thomas Smith, *De Republica Anglorum*, (ed.), Mary Dewar (Cambridge University Press, 1982). Neal Wood, 'Avarice and Civil Unity: The Contribution of Sir Thomas Smith', *History of Political Thought*, vol. 18, no. 1 (1997), pp. 24-42. D. H. Sacks, 'The Prudence of Thrasymachus: Sir Thomas Smith and the Commonwealth of England', in A. T. Grafton and J. H. M. Salmon (eds.), *Historians and Ideologues: Essays in Honor of Donald R. Kelly* (University of Rochester Press, 2001), pp. 89-122.

(52) Smith, *A Discourse of the Commonweal of This Realm of England*, (ed.), Mary Dewar (The University Press of Virginia, 1969), pp. 29, 32（出口勇蔵監修『近世ヒューマニズムの経済思想―イギリス絶対主義の一政策体系』有斐閣、一九五七年、二八、三一頁）.

(53) Smith, *A Discourse of the Commonweal*, pp. 24-25（『近世ヒューマニズムの経済思想』一二一―一二三頁）.

(54) Smith, *De Republica Anglorum*, p. 144. Smith, *A Discourse of the Commonweal*, p. 105（『近世ヒューマニズムの経済思想』一一六頁）.

(55) Quinn, 'Sir Thomas Smith (1513-1577) and the Beginnings of English Colonial Theory', *Proceedings of the American Philosophical Society*, vol. 89, no. 4 (1945), pp. 543-560. Dewar, *Sir Thomas Smith: A Tudor Intellectual in Office* (The Athlone Press, 1964). Morgan, 'The Colonial Venture of Sir Thomas Smith in Ulster, 1571-1575', *The Historical Journal*, vol. 28, no. 2 (1985), pp. 261-278.

(56) John Strype, *The Life of the Learned Sir Thomas Smith, K^t D. C. L.* (Clarendon Press, 1820), p. 131. Quinn, 'Sir Thomas Smith', p. 551.

(57) Quinn, 'Sir Thomas Smith', p. 551.

(58) I. B. Gentleman, *A Letter sent by I. B.* (London, 1572), E1^r, H2^r. George Hill, *An Historical Account of the MacDonnells*

of Antrim (Belfast, 1873), pp. 411, 415.

(59) A. J. Butler and S. C. Lomas (eds.), *Calendar of State Papers, Foreign Series, of the Reign of Elizabeth*, vol. 17: January-June, 1583 and Addenda (Public Record Office, 1913), p. 491.

(60) Richard Beacon, *Solon His Follie, or, A Politique Discourse touching the Reformation of Common-weales Conquered, Declined or Corrupted*, (eds.), Clare Carroll and Vincent Carey (Medieval & Renaissance Texts & Studies, 1996).

(61) プルターク『プルターク英雄伝（二）』河野与一訳、岩波文庫、一九五二年、一四―一五頁。

(62) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 13-14. Carey, 'Richard Beacon's *Solon His Follie* (1594): Classical Sources, Text, and Context in the Conquest of Ireland', *The European Legacy*, vol. 1, no. 1 (1996), pp. 207-213.

(63) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 18, 21.

(64) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 50, 53. D. A. Orr, 'Inventing the British Republic: Richard Beacon's "Solon His Follie" (1594) and the Rhetoric of Civilization', *The Sixteenth Century Journal*, vol. 38, no. 4 (2007), pp. 975-994.

(65) Sydney Anglo, 'A Machiavellian Solution to the Irish Problem: Richard Beacon's *Solon His Follie* (1594)', in Edward Chaney and Peter Mack (eds.), *England and the Continental Renaissance: Essays in Honour of J. B. Trapp* (Boydell Press, 1990), pp. 153-164. Carey, 'The Irish Face of Machiavelli: Richard Beacon's *Solon His Follie* (1594) and Republican Ideology in the Conquest of Ireland', in Morgan (ed.), *Political Ideology in Ireland*, pp. 83-109.

(66) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 28-29. 塚田『カメレオン精神の誕生』一五二―一五五頁。

(67) Beacon, *Solon His Follie*, p. 71.

(68) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 61-64, 75-84.

(69) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 105-106.

(70) Beacon, *Solon His Follie*, pp. 121-122, 136-137.

(71) Sir William Herbert, *Croftus sive de Hibernia Liber* (eds.), Arthur Keaveney and J. A. Madden (Irish Manuscripts Commission, 1992), pp. 26-29.

(72) Herbert, *Croftus*, pp. 52-53.

(73) Herbert, *Croftus*, pp. 74-77, 44-45, 58-59, 74-75, 76-77, 86-87.

(74) Herbert, *Croftus*, pp. 100-101. ヘーバートはこゝで、学問の行き過ぎを一方で懸念するリプシウスに敢えて異を唱えている (pp. 162-163)。Justus Lipsius, *Politica: Six Books of Politics or Political Instruction*, (ed.), Jan Waszink (Royal Van Gorcum,

2004), pp. 749–750.

(75) Herbert, *Croftus*, pp. 100–107. 同様にシヴィリティを目的とした教育の必要を説いた議論として、Canny (ed.), 'Rowland White's 'Discors touching Ireland', c. 1569', *Irish Historical Studies*, vol. 24 (1977), pp. 439–463. とくに、pp. 460–461.

(76) Herbert, *Croftus*, pp. 106–117.

(77) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, (ed.), A. C. Hamilton (Longman, revised second edition, 2007)（スペンサー『妖精の女王』全四巻、和田勇一・福田昇八訳、ちくま文庫、二〇〇五年）.

(78) グリーンブラット『ルネサンスの自己成型―モアからシェイクスピアまで』高田茂樹訳、みすず書房、一九九二年、第四章。

(79) Spenser, *The Faerie Queene*, p. 714（『妖精の女王』第一巻、一四頁）.

(80) Spenser, *The Faerie Queene*, p. 510（『妖精の女王』第三巻、三三二頁）.

(81) Spenser, *The Faerie Queene*, p. 510（『妖精の女王』第三巻、三三三頁）.

(82) Spenser, *A View of the Present State of Ireland*, in *The Works of Edmund Spenser*: A Variorum Edition, vol.10 (Spenser's Prose Works), (ed.), Rudolf Gottfried (The John Hopkins University Press, 1949); *A View of the Present State of Ireland*, (ed.), W. L. Renwick (Clarendon Press, 1970); *A View of the State of Ireland*, (eds.), Andrew Hadfield and Willy Maley (Blackwell, 1997). 以下では、この作品が初めて出版された一六三三年版を底本とした、Hadfield and Maley の版から引用する。同様に一六三三年版を用いた日本語訳として、エドマンド・スペンサー「一五九六年、エドマンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニーアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見（一）～（九）」水野眞理訳『文学と評論』第三集第二号（二〇〇二）三七―五五頁、『英文学評論』第七六巻（二〇〇四）一四九―一八一頁、第八〇巻（二〇〇八）三七―七八頁、第八一巻（二〇〇九）一―三九頁、『文学と評論』第三集第七号（二〇一〇）四七―六六頁、『英文学評論』第八三巻（二〇一一）一―二九頁、『文学と評論』第三集第八号（二〇一一）三八―六一頁、『英文学評論』第八五巻（二〇一三）一―二三頁、第八六巻（二〇一四）三七―六九頁。なお、一六三三年版のタイトルからは'present'がなくなるが、本稿ではそのまま『現状についての見解』とした。

(83) Spenser, *A View of the State of Ireland*, (eds.), Hadfield and Maley, pp. 11, 144. Elizabeth Fowler, 'A Vewe of the Present State of Ireland (1596, 1633)', in R. B. McCabe (ed.), The Oxford Handbook of Edmund Spenser (Oxford University Press, 2010), pp. 314–332.

(84) Spenser, *A View of the State of Ireland*, (eds.), Hadfield and Maley, p. 21.

(85) Spenser, *A View of the State of Ireland*, (eds.), Hadfield and Maley, p. 151.

(86) 以下でのスペンサーの議論が「ニュー・イングリッシュ」の見解を代表するものかどうかをめぐる、キャニーとブレイディの

論争については、Canny, 'Edmund Spenser and the Development of an Anglo-Irish Identity', in G. K. Hunter and C. J. Rawson (eds.), *The Yearbook of English Studies*, vol. 13 (1983), pp. 1–19; 'Spenser's Irish Crisis: Humanism and Experience in the 1590s', *Past & Present*, no. 120 (1988), pp. 201–209; 'Introduction: Spenser and the Reform of Ireland', in Patricia Coughlan (ed.), *Spenser and Ireland: An Interdisciplinary Perspective* (Cork University Press, 1989), pp. 9–24. Ciaran Brady, 'Spenser's Irish Crisis: Humanism and Experience in the 1590s', *Past & Present*, no. 111 (1986), pp. 17–49; 'Spenser's Irish Crisis: Humanism and Experience in the 1590s: Reply', *Past & Present*, no. 120 (1988), pp. 210–215; 'The Road to the View: On the Decline of Reform Thought in Tudor Ireland', in Coughlan (ed.), *Spenser and Ireland*, pp. 25–45. 山本正「「野蛮」の「改革」―エドマンド・スペンサーにみるアイルランド植民地化の論理」『史林』七六巻二号（一九九三年）七二―一〇二頁。「ブリテン」の観点を取り入れた研究として、Hadfield, *Edmund Spenser's Irish Experience: Wilde Fruit and Salvage Soyl* (Clarendon Press, 1997); *Shakespeare, Spenser and the Matter of Britain* (Palgrave Macmillan, 2004). また、戒厳令をめぐる同時代のコンテクストに着目した研究として、David Edwards, 'Ideology and Experience: Spenser's *View* and Martial Law in Ireland', in Morgan (ed.), *Political Ideology in Ireland*, pp. 127–157.

(87) Spenser, *A View of the State of Ireland*, (eds.), Hadfield and Maley, p. 92（「アイルランドの状況管見（六）」三頁）.

(88) Spenser, *A View of the State of Ireland*, (eds.), Hadfield and Maley, p. 160. これに対して、Hadfield, 'Was Spenser a Republican?', *English*, vol. 47 (1998), pp. 169–182.

(89) Carroll, *Circe's Cup*. Jason Harris and Keith Sidwell (eds.), *Making Ireland Roman: Irish Neo-Latin Writers and the Republic of Letters* (Cork University Press, 2009).

(90) Brendan Kane, *The Politics and Culture of Honour in Britain and Ireland, 1541–1641* (Cambridge University Press, 2010).

※本稿は、平成24–27年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究成果の一部である。また、本稿は九州大学政治研究会（2015.6.20）での報告を基にしたものであるが、紙幅の関係で本文と註を大幅に削っている。